

## 「民話」と「昔話」「伝説」について

小沢 さとし

民話、伝説、昔話、説話、民譚、口碑、お伽話、童話などといった、童心的な内容を持った物語を表す言葉はたくさんあるが、その中でもよく使われる、民話・昔話・伝説という言葉の意味を、我々はあまり考えることもなく気が向くままに使ってきたように思える。読書離れ、活字離れの昨今、息を吹き返しつつある「民話」や「昔話」「伝説」についても、その本質をしつかり理解しきれないまま、どちらかといえば曖昧にやり過してきたように思える。

最近では、映画、テレビ、小説、児童小説を問わず、人と人との交わりの中から滲み出てくる感動を描いたような作品はすっかり影をひそめて、マスメディアに乗った視聴率や売り上げだけが目当てで興味本位の奇妙な作品ばかりが目につくようになった。時代の置き土産であることは明白である。しかし、それに飽きたらない人たちは、今なお、いつの時代にも不変的な価値を持ち続け、人気の衰えない「民話集」や「伝説集」「昔話集」などにその避難場所を求めている。民話、昔話関連の出版も盛んになり、活字離れ時代にもかかわらず、静かなブームを引き起こしている。家庭で、保育園で、学校で、施設での「読み聞かせ」も盛んに行われて、かなりの人気を得ているようである。

いつの時代にも多くのファンを持つ、民話・昔話・伝説について、その各々の本論に入る前の「自己紹介」的な案内に絞って、論文というより一編の物語のつもりで、各々の姿をさまざまな面から眺めながら検証してみたい。

### ○民話と昔話・伝説・世間話の関係について

「民話」という言葉は昭和二十年代になって、急に勢いを増した言葉のようで、木下順二氏が昔話の『鶴女房』を再話、脚色して民話『夕鶴』として世に出した（昭和二十四年）あたりがきっかけのようである。「民話」という言葉は、民衆の間に広がった諸話」という意味が一目瞭然に読みとれるような、実に素晴らしい呼び名であると思う。

民話という言葉について関敬吾氏は、『笑話と昔話』（岩崎美術社・昭和四十一年）で、「民話という言葉は、ひとつの流行語となり、昔話よりは広範囲に使用され、いまや概念が曖昧になろうとしている」と指摘している。民話『夕鶴』から二十年近く経っても、まだ民話という流行語について疑問を呈している。ということは昭和四十年代になってもまだ、民話という言葉は完全には肯定されてはいなかったことが分かる。確かに民話とは民衆の間に広がった話ということだが、それは無限大であり、あまりにも広い意味を持った言葉で、厄介な言葉でもある。詳しくとらえようとしても、言葉の及ぼす世界が漠然としていて、その使用を迷わせる。民間で語られた話（物語）ということになれば、ごく近い時季をも含め、すべての話がこの言葉の中にとりこまれてしまい、迷路にはまりこんでしまいうである。

早川孝太郎氏は民話を単なる話ではなく「民話文学」としたが、ここではもつと踏みこんでみたい。まず民話は「民間に伝わる物語」という意味でとらえてゆきたい。民話の「話」という言葉を「物語」の意とする、ごく当たり前のことを、確認してから始めることにしたい。

研究者にとつては齒がゆいこととは思方が民話とは民衆の間に伝えられた単なる話や伝言ではなく、まとまった物語で、しかもその物語は「昔の田舎話（物語）」であるということの確認から始めたい。民話という言葉の中にはこの肝心な「昔」、「田舎」、「物語」という意味がこめられていることを忘れてはならない。

\* 民衆の間に伝えられてきた昔の田舎話（物語） ≡ 昔話 ≡ 民話。  
ということである。こうなれば民話というものの姿がおぼろげに見えてくると思う。

最近では一般に、民話は昔話と伝説と世間話から成つていているとする考え方が多くなつてきているようである。

(1) 民話 ≡ 昔話 + 伝説 + 世間話。

しかし (2) 昔の田舎話 ≡ 昔話 + 伝説 + 民話 (世間話)、

とする形も有力である。私は (2) の形の方が矛盾もなく実情にあつていていると思つてゐる。しかし、すでに書物やテレビなどでは、「日本の民話」とか「こどものための民話集」というように「昔の田舎話」を代表する言葉として民話という言葉が使われている例が多い。この場合は「昔の田舎話」を表す、昔話・伝説・民話の中から「昔」というものをあまり意識させない無難な名称と思える民話という語が選ばれたと理解している。今では「民話」という名称そ

のものが決して近代的ではない素朴な、どちらかといえば“やぼったい”感じの田舎の昔話というイメージが定着していると思う。それはそれでいいかと思う。しかし、民話という言葉の代わりに本来の「昔話」という言葉を使っても一向に構わないということである。民話という言葉を使うにしても、まず、同義語同士の民話と世間話との関連について、詳しい検証がされなければならない。

現在では、伝説は内容によつて、民話の一部という感じの話もあり、また昔話の一部という感じを持つ話もあることから、しっかり独立はしているものの、昔の田舎話を代表する名称としては少し弱い感じはする。そんなことで「昔の田舎話」を表す言葉としては、どうしても「民話」か「昔話」とする場合が多くなっている。

昭和二十年代になつてから盛んに使われ始めた「民話」という言葉より、「昔話」という言葉は、はるかに古い歴史と実績を持つて、みんなに親しまれてきた重い言葉である。しかし、昔話となると「どこまでが昔か」という物理的な問題が常につきまといつてきていた。そこで、なんとかその「昔」という文字をばかした呼び名をと模索した結果「民話」という、なんとなく無難な言葉にたどり着いたということのようである。しかし、昔々の物語を表現するのに、「昔」という文字を抹消してしまうのはいかがなものかとも思う。たとえ新しく看板をかけ替えてみても、民話も昔話もそして伝説も、結局、行きつく先は「昔の田舎話」という萱葺き屋根の家であるからである。

さて、昔話や伝説という言葉は、その姿が割合はつきりしているが、民話という言葉はスマートな感じはするが「昔の話」という意味合いがばやけている。その民話という言葉よりさらに後に出てきた「世間話」という言葉からは

「昔の話」という感じはまったく窺えない。物語性のないただの噂話のような感じしか受けない。世間話の意味としては「最初に何らかの意思を持って語られたまたは創作されたものでなく、自然発生的な話のこと」である。いわば「話し捨て」、「聞き捨て」のような話である。そんな世間話が即、民話や昔話の要因になれるのかという疑問を当然持つてしまふ。単純な世間話や噂話が伝承を重ねるうちに内容に作為が加わつて変形して、それが「世間話風物語」になつたというのなら納得できることはあるが……。

「民話」という名称について柳田国男氏は、かなり古い資料だが、自著『隨筆民話』（昭和十八年）の序で「民話」という言葉は、気の利いた名だと私も思っている。（とした上で）ただ自分たちの仲間に於いては、昔話が西洋で（英語のフォークテイルの訳として）民間説話と呼ばれ、それを省略して民譚とも民話とも訳している習慣を知っている故に今以てその使用をためらっているのである」として民話という言葉をあえて使わずに「世間話」という名称をもつて民話の意味に当てている。

これで分かるように「世間話」という言葉は昭和十八年頃から柳田国男氏が使うようになって急に使われ始めたかわば新参語であるということが分かる。それまでは民話という言葉も細々と使われてはいたが、多くは昔話という言葉が昔の田舎話を代表していた。

柳田氏のいう「世間話」という言葉の中には当然昔話や伝説も含まれているが、そのすべてを包んだ「世間に伝えられている昔の話」の意味であるということであつた。柳田氏は昔の田舎話を構成する一要素としてではなく、総括

する言葉として民話に代えて世間話の語を当てた。

昔話↓(民話) ↓世間話。 ということであるが、世間話という言葉は感じとしては、昔の田舎話というイメージからはすつかり遠のいてしまっている。江戸時代までは、民話という言葉も概念もなかったから、昔の田舎話は、ほとんどが昔話として処理されて何の不自由もなかったが、明治時代以降は、時代背景や生活環境が変わったこともあり、話の内容も様変わりしてきて、昔話だけでは括れなくなってしまった。新たに、世間話や噂話に端を発するような、現実に近い物語も出現するようになり、また西洋風の不思議な物語も出てきた。こんな状況に対処するために、昭和時代になって民話と同義語の世間話(柳田氏)が、同時に民話を構成する一要素にもなつて、

#### 民話Ⅱ昔話+伝説+世間話

という形を作つて、無理やり落ち着かせたようである。しかし、民話は世間話と同義語であり、その関係があやふやのままである。

さらに、昔は童心的で昔の田舎話はほとんど「昔話」で括ることができたが、時代が過ぎてから、昔話の雰囲気借りた「昔話風な世間話」もでてきた。さらに、昔話に固有名詞をいくつか投げ入れて、実際の出来事のように見せかけて物語を展開させるという、本来の伝説のありかたとは一寸変わった現実路線型の伝説も出てきた。そんな伝説群はその出発時点では昔話と紙一重のものであつたともいえる。さらにその後になつて素朴な世間話に遊び心が加わつた程度の軽い感じの「世間話風物語」ともいえる物語も出てきた。そんなことで、民話の構成要素の一つとなつている世間話という家の中には「世間話風物語」と「昔話風世間話」とが入り混じるようになった。このように民話を

構成する一要素といわれている世間話という言葉は、単なる世間話、噂話という言葉だけではとうてい括れないということである。これを列式で表わせば、

\* 昔の田舎話（物語） || 昔話 + 伝説 + 民話（世間話風物語・昔話風世間話）。

ということになる。ここでの民話は、昔の田舎話を代表するものではなく、もっぱら世間話を代表するだけの言葉となっている。もともと民話と世間話は同義語であるから当然といえば当然であるが、こうしてここでは、昔話、伝説、民話は、それぞれの力関係は互角で、おたがいに協力しあつて各々が昔の田舎話を構成する一要素になっている。そして、昔話、伝説、民話、三つの名称の中から民話という言葉が「昔の田舎話」を一括する名称として一番多く使われるようになったととるべきである。

民話（昔の田舎話） || 昔話 + 伝説 + 民話（世間話）

という形である。ちなみに短編集などの書籍を出版する場合、そこに収められたいくつかある作品のタイトルのなかから一つを選んでその書籍のタイトルとする場合が多いが、それと同じことである。そんなことで、タイトルの民話の代わりに昔話としてもまた場合によっては伝説としても構わないということである。私は少しやぼったい感じはするが、ズバリ「昔の田舎話」としてもいいかと思う。

関 敬吾氏は、これもかなり古い話になるが、昭和十年に『島原半島民話集』という本を出している。同じ内容で昭和十七年に『島原半島昔話集』を出している。内容が同じなのに、一方は「民話集」、また一方は「昔話集」となっ

ている。ここでの注目は、昭和十年に「民話集」としたものを七年後に「昔話集」としたことである。普通に考えれば昔話集としたものを新しい民話という言葉に代えるところかと思う。いったんは民話集にしてみたが、ずっと親しんできた昔話の方がいいということで、七年も後に出した方を昔話集という言葉に替えていることである。いずれにしても関氏は、この時点で民話という名称と昔話という名称のどちらを使うかで悩んだであろうことが伺える。少なくともこの昭和初期の時代は、民話も昔話も同義語に使われていて、民話という言葉の勢いも弱かったことが分かる。結局、この時点で関氏は

\* 民話 || 昔話

と捉えていて、伝説も昔話の範疇にしていた。しかし昭和三十四年の『日本民族学体系』（巻十）の中で、現在、昔話ということばは広義にいわゆる本格昔話、笑話、動物譚を包括する言葉としても使用されるが、わたしは混乱をさけて狭義の昔話のみに「昔話」ということばを限定し、民話を口承散文の一般の名称として使用する”とした。昔話を狭義の意に使うとは解るようで解りづらいが、昭和三十四年になって、関氏もようやく昔の田舎話の散文を一括した呼び名として「昔話」に代えて「民話」という言葉を使うことになったとしている。昭和二十四年に木下順二氏が『夕鶴』で民話という言葉を使つてから、十年後に関敬吾氏も昔話から民話へ呼び名を変えている。このことから、現在何の気なしに使っている民話という言葉も、昭和の中頃になって、ようやく一般的に広く使われ始めたことが伺える。

木下順二氏は「民衆の生活の中から生まれ、民衆によって口から口へ伝えられていった民間説話一般を民話とする」とした。ここでは「昔」というイメージは薄いが、説話という言葉が使用されていてその内容がかなり絞りやすくなっている。説話とは本来、人が現実の世界から離れて異郷に行ったり、異類との交渉を可能にさせたりできる話のことであり、現実と過去とをつなぐことのできる不思議な物語を意味する言葉である。言葉の意味するところの雰囲気は多少違うが説話は「物語」や「昔話」「おとぎ話」などとほぼ同義語といえるので、単なる世間話や噂話ではないものということである。そこで木下氏は、民間説話（民話）≡昔話としたかったようだが、昔話は文字通り昔の話になってしまふということで、それと区別するために民話の語を使ったということであった。木下氏という民話とはイメージとしてはあくまでも昔話（物語）や伝説ということのようであった。しかし木下氏もその後『日本の民話』（毎日新聞社・昭和三十五年）では「昔話は語感からしても、今では童話の一分野でしかない」と指摘し、さらに「童話もまた民話の一部分にすぎないのだ」として、「花咲か爺」や「一寸法師」は民話であると説いている。確かに民間に伝えられた物語のすべてが民話ということからすれば昔話の「一寸法師」も童話の「一房の葡萄」もすべてが民話ということにはなるが……。

現在使われている意味での童話という名称は大正時代から定着したもので、それ以前はほとんどが昔話となっていた。明治時代になってもまだ「昔話」としていたが、昔の話というイメージをあまり出したくなく、しかも不思議な物語の場合には「お伽話」という言葉を使っていた。このお伽話という言葉は、昔の話という感じを与えながら、そ

れほど気にならない不思議な言葉で「しゃれた言葉」として、一時期よく使われていた。ちなみに明治時代の初めに  
出た、小川未明の『赤い船』という童話集は、近代童話の嚆矢とされているものだったが、そのサブタイトルは「お  
とぎ話集」だった。さらに巖谷小波が明治二十五年に「日本昔話集」(二十四巻)を出したが、五年後の明治三十年に  
は「日本お伽話」(二十四巻)を出している。一方は「昔話」また一方は「お伽話」としていることから、「昔話」  
と「おとぎ話」の両方の名称が昔の物語を表わす言葉として使われていたことが分かる。私はずっと「昔話」は昔の  
日本の田舎を舞台にしているの、どちらかといえば野暮ったい話、ととらえて、「お伽話」は昔話よりさらに不思議な話で、  
それほど田舎にこだわらない、どちらかといえば西洋風の物語といった感じを受けていたように思う。

北海道のアイヌや、南西諸島には、本土での昔話や伝説とは全く違った、神話を思わせるような、独特で不思議な  
物語がいくつも伝えられているが、それらは私の感覚では、まさに「神話のおとぎ話」といえるものと考えている。

木下氏は、その著書『日本の民話』(毎日新聞社・昭和三十五年)で、五大昔話を始め、「大江山」「道成寺」「天人  
女房」など、ほとんどすべての物語を民話として束ね、さらに、「笑い話」「小話」に至るまで、すべて民話と位置づ  
けている。そして「昔話は民話の一分子である童話のさらにその一分子に過ぎない」としている(前述)。要するに昔  
話は、民話という大きな西瓜の中にある一粒の種に過ぎないような存在だということのようであるが、昔話は歴史も  
古く、そんなに小さな存在では決していない。民話入昔話 であるといえるほどの存在であることは既に述べてきた。  
木下氏はあまりにも形式的、現実的に民話というものを見ていて、それぞれの歴史、時代背景、物語の感じ方(感覚)、

創作手法などを無視した一方的な論理になってしまっている。五大昔話や「大江山」などは、ずっと古い時代から昔話として誰にも親しまれ存在し続けてきた日本を代表する昔話そのもので、これが昔話でなければ、日本に昔話などは存在しないといつていい。後に民話という言葉が出てきたからといって、ずっと親しまれてきた昔話を、ことさらに民話や童話とする必要性はまったくない。昔話とした方が「はるか昔の物語」といつた当時のわくわくした雰囲気も感じとることができる。昔話という素朴な言葉が表わすフィーリングというものも大切にしなければならぬ。昔の城を今風にビルディングといい換えたりする必要はないということである。さらに民話は子ども向けの話ばかりではないということも理解する必要がある。民話の中には子どもには向かない話も数多くある。童話は文字通り子ども向けで、しかもどちらかといえば幼年層を対象にした物語であるから、重なる部分はあるかも知れないが、童話は民話の一部分ということにもなりえない。

近代童話は前述のように、特に大正時代以降、芸術的、文学的観念のもとで主として現代社会を背景にして創作され始めたもので、その発生時から現代の創作物語で、昔の田舎話として出発した民話とは違う時代と世界で成長したものである。

さて、民話Ⅱ昔話＋伝説＋世間話 という形が広く認められていると前述したが、この場合は「民話」という言葉は「伝説」や「昔話」や「世間話」といつた言葉の上に位置する格上の言葉となっている。つまり「伝説」「昔話」「世間話」は民話の中の一要素、民話の配下ということになる。民話という親分の下に伝説と昔話と世間話という三人

の子分がいるという構図になる。しかし、柳田国男氏も指摘しているように、民話は言葉を代えれば世間話である。その世間話と同義語である民話を構成する一要素というのはおかしなことである。同じ人間が親分と子分とに分かれて存在しているわけであるから。そんなことを考えると、極端に言えば民話をわざわざ昔話＋伝説＋世間話とすること自体が、無用にさえ思えてくる。昔の田舎話Ⅱ昔話Ⅱ民話とするだけでもいいようにも思える。

さて、最近、例えば、『くの民話・伝説集』、『くの民話・伝説・昔話集』、『くの民話・伝説集』というような書籍が、各地で売られているが、民話Ⅱ昔話＋伝説＋世間話 という形からすれば、この場合の民話、伝説、昔話が同等の地位に並んでいることはおかしなことになる。この場合は『くの民話集』とするか、『くの民話集』とでもしなければ上下関係がおかしい。しかし実際はこのように同等並びで扱われている場合が多い。同等並びということは、民話、伝説、昔話はそれぞれ違った長をもってはいるが、互角の力関係であるということの証しに他ならない。ここで気になるのは、『くの民話と伝説』『くの昔話集』というようなタイトルでいくつもの本が出ているが、『くの世間話集』といった本は目にしたことがない。そのことはやはり、『世間話』の語は力が弱く何処かに隠れているというところである。いうまでもなく世間話は同義語の民話という語の中に隠れていて、独立できないでいるということである。独立ができた語は昔話・民話・伝説で、その三つが「昔の田舎話」を構成する要素を表す言葉である。再度図式にすれば、

\*昔の田舎話Ⅱ昔話＋伝説＋民話（世間話風物語＋昔話風世間話）。

\*民話Ⅱ昔話＋伝説＋民話（世間話風物語＋昔話風世間話）。

ということになるが、昔の田舎話の代わりに、今はやりの民話という名称にしても構わないということである。その場合は民話という言葉は「世間話風物語」と「昔話風世間話」の両方の意味を持つ言葉であると同時に、「昔の田舎話」を代表する言葉にもなっている。いずれにしても、民話という言葉は、昔話や伝説と共に「昔の田舎話」を構成する三要素の一つである。この形が安定した適切な形であると思う。

ところで、我々が幼い頃に親しんだ昔話（伝説、神話を含む）はどれも楽しく、また不思議な思いで聞いたし、夢中になって読んでもきた。どの話も単なる世間話や噂話とは違った独特な味わいのある物語であったように記憶している。それは「昔々の物語」だったことと、現実離れた虚構の世界へ誘われたことへの興味だったと思う。さらに中には異国情緒たつぷりな西洋風の話もあり、そんな話にも夢中になったが、それらは秀俳気的には「昔話」ではなく「お伽話」であったように思われる。当時、昔話といえば、現在感ずる民話より、もっと不思議な興味をわかせる話だったようにも思う。昔話という言葉はそんな思いを今でも抱かせる言葉である。この大切な「昔」という言葉を何とかばかそうとして、民話とか民譚とか世間話とか、いろいろと先人たちが苦勞してきたようだが、その避けて通ろうとした「昔の話」こそが、民話そのものであり、昔話であり、伝説であつて、それが人々を惹きつけてきた魂ともいえるものである。

さて、今度は、昔の田舎話の要素になつてゐる世間話（世間話風物語・昔話風世間話）の中身について検証をしたいと思う。まず、「世間話風物語」は本来、

（例）「夕方、野原で草を刈っていたら、急にあたりが暗くなって、雨が降ってきた。あわてて木下に逃げこんだが、すっかり濡れてしまった。しかし、すぐまた嘘のように晴れた。きつと、これからキツネの嫁入りが始まるからだ」

このような、少しの遊び心（キツネの嫁入り）が加わつた程度のごく素朴な世間話であつたと思われる。私の感覚ではこんな話こそが民話（世間話）の原点であり、民話そのものといえると思う。

純粋な世間話の発生の原点は立ち話、井戸端話、縁側話、野良での話、作業場での話、もらい風呂での話、などさまざまな場所で話されたであろう、とるに足らないような話から出発したものがほとんどだつたはずである。そこで聞かされた世間話や噂話は当然のことながら、多少の誇張や遊び心が加わつた、短くて素朴な田舎の話であつたはずである。ところが伝えられる過程で変化したり、手が増えられたりして世間話風物語になつたものが多くなり、さらにその話にさまざまな手が加わつて、いつの間にか世間話の庭から逃げ出して、昔話風世間話になり、さらに手が加わつて「キツネの嫁入り」といった楽しい昔話になつてゐるものもある。

現代は都市化が進み、情報過多の時代になつて、民話や昔話は生まれにくい環境になつてしまつた。そんな環境の

中でも、明治以降にもいくつかの民話や昔話というものも出現している。現代に生まれている民話も、やはり「昔の田舎を背景にした物語」になっているはずである。だからこそ、人びとはそんな昔の田舎話の呼び名を小説とも童話とも呼ばず、民話や昔話と呼び、素朴で穏やかだった昔の時代を懐かしがり、その世界へ引き込まれるのである。私は「昔の田舎話」を表す言葉として「民話」だけではなく、「昔話」の語も併用して使い分けるのが最善とと思っている。

#### \* 民話（昔話）と童話の関わり

それでは、童話と民話の関わりはどうなるのか。もう一度検証してみたい。木下順二氏は「童話は民話の中の一分子」と説いているが、民間に伝えられた話がすべて民話なら、理論的には当然、童話も民話ではある。しかし、最初から民話として創作された物語は別にして、現在の童話を民話という人はほとんどいない。大正七年創刊の鈴木三重吉主宰の『赤い鳥』での近代的、芸術的童話の誕生以後、童話という言葉の中には、垢抜けした「現代の話」という意味合いが色濃く入りこみ、ほとんど垢抜けのしない「昔の田舎物語」とはなじまない面が多くなっている。しかし、その垢抜けしない素朴すぎるほどの物語こそが昔話の魅力であり、民話の魅力であるが……。さらに現代の童話という言葉の中には、「芸術的な」という意味合いも含まれていて、「感動を与える」という要素が極めて大切にされている。この点も民話とは大きく違う要素である。さらに民話は童心的な物語も多いが子どもには向かない話も多い。それと子どもが対象の現代の童話を同列にするのにも無理がある。童話の内容は現代社会が舞台になっている場合が

多く、民話のように昔の、または昔風の素朴な田舎の物語ばかりではなくなっている。近代都市を舞台にしたリアルな童話もあり、取材に基づく童話もある。民話とは異質な世界のもので、童話はやはり童話である。ただ、現代においても、民話（昔話）といえる物語も生まれている。例えば、新美南吉の「ごんぎつね」のような作品は、昔話であり、また民話でもあるが、童話に分類されてもいる。この作品はおそらく、何らかの民話や昔話の影響を受けて出来上がった物語であろうと思える。これが作者不明で、いつごろ世に出てきた作品かも分からない場合は、おそらく、民話や昔話としてあつかわれるかと思うが、できた時代（大正時代）や作者までもが分かっている作品のため、童話ということにもなると思うが、やはり厳密には民話であり、昔話である。このように現代に生まれ、作者も分かる作品は童話とするのが妥当かと思うが、現段階においては、あくまでも「民話風童話」であり「昔話風童話」ということになる。

しかし、その童話という名称の意味さえも今では曖昧に使われている。童話は、ごく小さな子どものための物語というイメージが強い。中学生や高校生向けの話ともなれば一般には童話とはいわない。『少年少女小説』などという言葉もあるが、これといった呼び名がない。童心小説（物語）とでもいいたいが、それでもしっくりしない。そんな童心小説といった部類までを童話という言葉で括るのは無理がある。幼少児と大人との中間にいる子どもたちの物語群を呼ぶ適当な名称が日本語にはないのが悲しい現状である。

## ○伝説とは

古い、古い、まだ文字を持たなかった時代には、村の起源や信仰、年中行事、風習など、すべてが「いいつたえ」とか「いわれ」として伝承されてきた。そんなことで伝説は古くから「ある特定の事物を真実の話として伝えたい」という意志を持つて伝えられてきた「群の話」とされている。

科学的知識がほとんどなかったその昔は、伝説の中の神秘的な世界をみんながしつかり信じて毎日、神妙に、つつましやかに暮らしていたと思われる。だからこそ神秘的な伝説からさまざまな民間信仰が生まれ、その結果、あちこちに寺院や神社が建ち、地藏や観音像が現れ、豊作を感謝する村祭りが生まれ、雨を願う雨乞い行事も始まった。日本中に数えきれないほど行われている、さまざまな行事のほとんどが、神秘的な伝説のなせる業といえることができる。科学萬能の現代でもなお、昔からの信仰の多くが伝わって、大切にされ、残っていることを考えると日本における伝説の及ぼした影響の大きさには驚異さえを感じる。

さて、伝説には四つの流れがあるように思う。

(1) 村の起源、年中行事、禁忌、風習などを、神秘のベールに包みながらも興味深く後世に伝えておこうという意思を持った、本来の真面目な伝説である。この伝説は、いろいろな民間信仰を生み出して日本における信仰や行事を切り開き、現代に伝えてきた。

(2) 興味深い昔話などの中に実存するさまざまな固有名詞を投入して「おらが村の話」にしたり「寺院や神社の起源話」に塗り替えたりして、あたかも事実の話のように作り代えられたいわば昔話などからの「転化伝

説」。

(3) 最初から宣伝広告が目的で作られた伝説。この伝説の場合は、伝説を送りだす側の思惑、計算、欲望などが強く出ている。この流れは平成の現在になって、ますます激しさを増している。毎日、毎分、テレビやインターネットなどによる、観光地への誘致合戦、企業間での宣伝合戦はまさにこの伝説の末路であるといえる。

(4) アイヌや南西諸島には、独特な神話的伝説が伝わっている。これらは、昔話(神話)としてもいいとも思うが、本土では味わえない、神話の雰囲気を持った不思議な物語になっている。その不思議な物語によって何らかの教訓を与えている。その点で伝説ともいえる一群である。

この四つの流れのある伝説を、もう少し詳しく検証して見たい。世間話が単なる世間話ではなく、世間話風物語や昔話風世間話であるように、伝説も単なる伝言ではなく、文字通り伝えられてきた、または伝えようとした説話、で「どうしても伝えておきたい、伝えておかなければない説話」という意思がその説の字の中にこめられているはずである。伝説は実際にはそのほとんどが架空のことでありながら、あくまでも真実性を主張するという、いい意味での詐欺的要素があるのに対して昔話は、どこまでも、どこまでも不思議な世界を描いた昔の空想物語である。

ところで、講談社発行の『日本の民話』(平成二年)では伝説の分類の例として

○村の草分けにまつわる長者伝説、落人伝説。

○鬼、天狗、河童など妖怪にまつわる伝説。

○ゴマ植えず、餅つかず、門松たてずなど、日常生活にかかわる禁忌伝説。

○行事、しきたり、地名などの由来伝説。

○歴史上の实在人物にまつわる伝説。

○その他、築城、落城伝説。沈鐘伝説、機織淵、椀貸し淵伝説、羽衣伝説、山の背くらべ伝説、洪水伝説、など。と例にあげている。

伝説の分類として、関 敬吾氏は『日本民族資料事典』（昭和四十二年）で、伝説を「自然伝説」「歴史伝説」「信仰伝説」というように三分類している。野村純一氏は『日本伝説体系』（昭和五十二年）で「自然説明伝説」「文化叙事伝説」とに分類している。柳田国男氏は伝説の内容を「木」「水」「石」「岩」「塚」「坂・峠・山」「祠堂」に分類している。いろいろと分類の仕方はあるとは思いますが、それぞれの伝説の中身を詳細に分類すればさまざまな分類となつて、その裾野は拡がるばかりである。

すでに述べたが、伝説の中には、昔話の中に特定の地名や人名など固有名詞を投げ入れて、より真実の話と思わせるように工夫されているものも多い。簡単にいってしまえば、「昔話の中へ特定の地名や特定の人物などの固有名詞がいくつか折りこまれた瞬間に昔話は伝説に姿を変えてしまう」ということである。そんな「転化伝説」も含んで、伝説のほとんどが架空の話である。それにもかかわらず、あくまで真実の話、実際にあつた事柄のようにさかんに説明、伝言、教訓、注意喚起、宣伝などさまざまな風を吹かせながら継承されている。これが多くの伝説の姿である。

科学的知識や通信機関がほとんどなかった時代には伝説のもたらす影響がいかに大きいものだったかは想像をはる

かに越えたものだったと思われる。

さて、そんなことも踏まえながら、伝説の自身を分かりやすくしかも大胆に区分すると、

伝説Ⅱ **説明、伝達** + **宣伝、広告** + **説教、注意喚起**

という形が成り立つ。この分野でほとんどの伝説の大まかな区分ができる。このように分ければ大変に分かりやすい。この仕分けでその伝説の目的が解り、伝説の姿が浮かび上がってくる。ほとんどの伝説はこの三つの要素の中に繰りこむことができる。あまりに枝葉のことを気にし過ぎていても解りにくくなるだけで限りがない。大胆にしつかりその正体を見分けることが肝心である。

それではここで、前述の講談社の『日本の民話』の伝説の分類をこの区分にしたがって仕分けしてみることにする。

\* 村の草分けや、落人伝説は実際の地名や人物を入れた **説明、伝達** であり、長者伝説は、奢ることへの警鐘の **説教、注意喚起** である。

\* 鬼、天狗、河童などの妖怪にまつわる伝説は、もともとは昔話であったものを具体的な地名や人名などを加えて伝説化した **転化伝説** である。

\* 禁忌伝説は **説教、注意喚起** であり **説明、伝達** でもある。

\* 行事、しきたり、地名などの由来伝説、 **説明・伝達** で収まる。

\* 歴史上の实在人物にまつわる伝説は、これもひっきりなしに人名をはじめ固有名詞が出てくる話になつていて、いかにも真実と思わせる話が多い。事実にもとづいて出来た伝説ということでも事実に近い部分もあるが、

話の内容によって当然、説明、説教、宣伝などの要素に区分される。(この伝説は地名、人名など実在の固有  
名詞が幾つも出てくるのが特長)

\*その他、築城、落城伝説は「説明・伝達」であり「転化伝説」の色合いもあるようである。沈鐘、椀貸し伝説は「説教、注意喚起」であり、内容によっては「転化伝説」ともいえそうである。機織伝説、羽衣伝説は昔話に地名、人名などを入れてその地の伝説に転化された「転化伝説」である。

このように見てくると、本来は「昔話」であったはずの話が、いつの間にか転化して「伝説」になってしまったものが意外に多いことが分る。

現代は科学万能の時代になって、すべてが科学的に分解されて、解明されてしまうが、その昔はその科学の代わりが伝説であったといえる。人々は、古い師を信じ、伝説に忠実に従ってきた。そんな中からさまざまな信仰が生まれ、その時代の面影を残しながら、現代でも信仰は続いている。それらは、決して科学では解明できない世界である。科学万能の現代ですら、解明できない世界ということは、その昔ではいかに大きな力を發揮していたかが容易に想像できる。あらためて伝説というものの底知れない脅威を感じてしまおう。

伝説は昔のある時代に、人物、地域、神社、仏閣、山岳、河川、池沼などを舞台に上げて、ある出来事や特定の事物を実際にあつたことと信じさせようと仕組まれたいわばマジック物語であるが現代の我々にはそれがマジックと分つていても、ひよつとすると真実の話かも?と思わせる魅力を持っている。人間はあわただしい現世を忘れて、避難

場所をつくり、そこでしばし現実を離れた夢を見ることの楽しさを知っているが、伝説はそんな夢追人を楽しませてくれる不思議な力を持っている。

なお、伝説にはいろいろな事物の由来を伝える伝説（説明、伝達）も多いが、同じ由来話でも例えば「小鳥の前世」「猿の尻が赤いわけ」「亀の甲は何故出来たか」「くらげに骨がないわけ」といった由来話は、実際の話とは誰も思わない。真实性を伝えようとする伝説とはいえないものであることは明らかである。さらに八重山、宮古諸島や北海道のアイヌ地方などにはさまざまな不思議な興味深い由来話も多く伝わっているが、これらは昔話（神話）と交差する一群である。

### ○昔話について

昔話は「最初から創作された、昔の田舎を舞台にした虚構の世界の物語」である。

しかし日本の昔話は、日本独特の物語も多いが、中国を始め、世界各国に広く伝えられている昔話と同じ内容や似た内容のものが意外に多くあり、昔話は国際的な広がりを持つているといえる。日本では、江戸時代頃までは昔話の名称は昔話のままでもよかったが、時代が過ぎることに昔話が枝分かれして、伝説や世間話風物語もでてきて、「昔」という言葉がなんとなく邪魔になってきた。そんな中で一時期「お伽話」「説話」などという言葉を使って「昔」という

言葉を隠したりした。そんな背景があり、昭和二十年代後半頃になって昔話より広義な意味を持たせた民話という言葉が使われ始めて、本来の昔話の「昔」というイメージが名称からは大分薄らいできてしまった。

昔話は、本来、まず自然発生的に使われてきた「むかし、むかし」「むかし、あるところに」という、漠然とした言葉が冒頭にきて話が始まる昔の田舎話である。電話もテレビもラジオも、ましてインターネットや携帯電話など及びもつかなかった物静かな時代にあつては、大人も子どもも、珍しい昔話を聞くことは、最高に楽しい一時だったと想像できる。語り手が「むかし、むかし、あるところに……」と話し始めたときに、聞き手は固唾を飲んで昔の、さらに昔の世界へと引きずりこまれてゆく。「昔」という言葉は人々を現実の世界から過去の夢の世界、不思議な世界へと誘う魔法の言葉であつた。それほど重要な言葉であつたことを忘れてはならない。昔話は前述のように「昔、あるところに」とか「昔、むかしの話です」というように、時代や場所や人名などをぼかしたまま、人々を虚構の世界へと一気に誘い、不思議な物語が始まる。場所や人物を限定しないため、一つの話が、ある特定の場所や人物を指していない。したがって江戸の昔話はそのまま京の都の昔話であつても構わないということが多い。ただ、ある特定の効果を演出するために、例えば「お江戸は日本橋の」とか「京は五条の橋の上」というように実際の地名などを入れて、江戸の雰囲気とか京の雰囲気などをより効果的に醸しだし、その話の効果を上げる場合は多々ある。信州の「孝行猿」の話のように、山奥というイメージをことさら強く出した時には、信州の山奥の村と出せばその効果がるというものであるが、これはある特定の事物の宣伝効果をねらつた伝説とは違い、昔話の内容を盛り上げるため

の手段であることは明白である。

昔話は、いかに面白く、いかに楽しく、いかに悲しく、いかに恐ろしく、そしていかに不思議にと作者や語り手は物語を組み立て、語るための工夫をして「桃太郎」「花咲か爺」「舌切り雀」など見事な昔話を世に伝えてきて、今になっても、ほとんどの日本人が知っている昔話になっている。

\* 巖谷小波の「昔話」と「お伽話」について

ところで、今知られている昔話の多くは明治時代になって、巖谷小波が、その昔から全国各地にばらばらに伝えられてきた昔話を、収集して整理、統合、加筆などを行って、オーソドックスな昔話にした、いわば「小波昔話」といった色合いの濃い話となっている。昔話と小波とはそれほど深いつながりがある。そこで、その小波にもふれておくことにする。

明治二十五年頃、巖谷小波（明治三年～昭和八年）は本格的な昔話の中から『五大昔話』を初め、各地に、さまざまな内容で伝わっていた昔話の骨格をまとめて、それに自分なりに加筆、修正を加えて『日本昔話』二十四巻を刊行した。これによってそれまでは、ばらばらな内容で伝えられていた主な昔話が、最大公約数的にまとめられて、すっきりした、いわゆる「小波昔話」となった。そんな小波の再話手法については賛否両論の論議もあつたが、誰にもわかりやすい昔話となつて、国定教科書にも取り上げられるようになった。こうして小波昔話は日本中に広まつていっ

た。現在我々が知っている主な昔話の多くは小波の再話再生による昔話であるといえる。

小波は、さらに明治三十年に『日本お伽話』（二十四巻）を明治三十二年には『世界お伽話』百巻を実に九年間に渡って刊行した。この時点で注目されるのは、小波も昔話という語とお伽話という語とを使い分けていることである。明治二十五年頃には昔から親しまれてきた「昔話」の語を使つてみたものの、小波もやはり、何でも昔話にしてしまうことに抵抗を感じたのと、特に世界に広がっている昔の話は、日本の田舎話という雰囲気と違つていたし、昔の田舎の物語では括れない不思議な話も多くあり、それらに対応するために「お伽話」の語を使用したように思われる。小波も明治三十年頃には「昔」にこだわらないお伽話（噺）の言葉を使つている。特に世界の楽しい不思議な話を日本の田舎話を意味する昔話という言葉で表現することには抵抗を感じたものと思う。その意味でも「お伽話」という言葉は適切な言葉だつたと思える。

民話という言葉は英語のフォークテイルの訳として使われ始めたようだが、このフォークテイルの訳としては「お伽話」でもよかつたかと私は思う。この頃から「昔話の昔とは何時までのことか」という疑問と「世界中に伝えられているような、奇想天外の物語」と日本での「昔の田舎話」とを区別するために「説話」や「お伽話」の語を使うようになったのだと推測できる。小波が後世に残した課題だつたのかもしれない。私は日本以外の各地に伝わっている物語を呼ぶのに「お伽話」という言葉に王様が出てきたり、皇女様が出てきたり鼻の長い魔法使いのお婆さんが出てきたりする物語も生まれているが、それらはやはり「お伽話」とするのが一番分かりやすいと思う。この場合でも、西洋風の不思議な物語が大正時代以後に出てきた場合には、お伽話とするより童話とする方がよいかとも思うが、お

伽話という言葉も捨てがたいものがある。

○昔話Ⅱ（日本の）昔の田舎話      ○おとぎ話Ⅱ（西洋風の）不思議な物語

さて、もともと昔話は、世界中に広がっている物語も多く、まして、誰が創作したものかもほとんど分らず、しかも物語がさまざまに枝分かれもしている上に、内容は虚構の世界であるから、どの話が原話かも分らない場合が多い。ただ原話そのものは、思ったよりは面白くない話が多かったと想像できる。研究者たちにとっては原話という姿を求めて、留めておくのは欠かせない仕事ではある。しかし昔話を読んだり、聞いたりする者は、ほとんどが子どもたちである。子どもたちは、より分かりやすく、より面白く、より悲しく、より不思議な物語を歓迎する。そんなことを考えれば、再話というものを否定する理由はまったくない。「再話」「原話の保存」どちらの作業も大切な車の両輪である。

小波は再話に力を入れたが、その他にも「児童人形劇」の普及や各地で「昔話の口演」なども積極的に行って、それまでは地方区だった昔話を全国区に押し上げた。その功績は大である。

\* 神話について

「神話」は創作物語であり、虚構の世界を描くという点では、昔話中の昔話といえるが、内容が国土や文化、果ては宇宙にまで及び、あるいは人類の始まりなどを語る神々の物語など、とてつもなく大きな話が多く、しかもあまり

にも唐突過ぎて昔話からは一応は切り離して語られる場合も多い。日本における神話は一般には『古事記』『日本書紀』『風土記』『古語拾遺』『延喜式』などの古代文献にある神々の物語を指しているが、ここでは有名なイザナギ、イザナミ二神による国造りの話、天の岩屋戸の話、スサノウ命の大蛇退治の話、海幸、山幸の話など唐突ながら心躍らせる話も多く見られる。

そんな本格的な神話の他にも、アイヌ地方のカムイユーカーラや宮古、八重山諸島、沖縄などの島々には、本土の物語とはまったく違った、独特で不思議な神話的物語が多く伝えられている。

「山の背くらべ」「ダイダラホウシ」「赤神と黒神」「天人女房」「三輪山神話」「蛇婿入り」「豊玉姫神話」など民間信仰にもとづいた神話の雰囲気を持つ「神話風昔話」も各地でかなり多く語られてきてそれらに関連するさまざまな民間信仰も伝わっている。

### ○結びとして

近頃では民話の中に自動車やタクシーが登場したり、税務署の役人を煙にまいたりする「現代版民話や昔話」もできているが、それらは果たして民話や昔話なのかの検証をする必要があるように思える。「幽霊タクシー」の話などは民話というより怪談話であり、税務署の役人話はその背景を昔の田舎の話にして「遊び心」が加われば民話といえるが、大都会の中での話であればごくありふれた噂話となってしまう。民話や伝説はやはり昔の田舎を舞台にした物語でな

ければならない。

これまでも研究者などが苦勞してきたのは、この「むかし」という時間の区切りができなかったためである。しかし、ここで「昔」を考える上で大切なことは、物理的な時間の問題ではなく、物語の背景と内容の問題であるといふことである。物語の背景が昔であつて、内容が素朴で、やぼつたい田舎での物語であれば昔話であり民話であるといえる。何処までが昔かという時間的なことで、悩む必要はまったくない。今でも平安時代風の昔話が生まれるし、江戸時代の昔話も大正時代の民話も生まれるからである。

我々は民話や昔話を媒体にして、いつでも昔に戻つて、素朴で温かかった田舎人の息づかいのする原風景の中に入つてゆくことができる。言葉を代えれば

“今となつては昔、むかしの人間社会の原風景が見られ、味わうことができるのは、民話や昔話の世界だけである”  
ということである。